

# ニューヨーク補習授業校

平成二十四(二〇二二)年度

## 卒業式特集号

2013年5月11日発行  
56 Harrison Street  
204 New Rochelle  
NY 10801

### 平成二十四(二〇二二)年度卒業証書授与式

平成二十五年三月十七日(日)午前十時十五分から、ニューヨーク補習授業校の卒業証書授与式が、アルバート・レオナルド ミドルスクールで行われました。

式は厳粛な雰囲気の中にも、例年同様卒業証書授与の折に観客席から拍手や掛け声が飛び交うなど、補習授業校らしい卒業式となりました。卒業生の皆さんは、緊張した中にも晴れやかで自信に満ちた表情で式に臨み、初等部六十三名・中等部二十名・高等部七名、計九十名が巣立っていきました。



ここに紹介する「送辞」「答辞」には、代表者の児童・生徒だけでなく、

補習授業校に学ぶすべての子どもたちの、これまでに経験してきた様々な体験や苦勞、そして深い思いが凝縮されています。

楽しかったこと、苦しかったこと、そして悲しかったことなど、列席したすべての人が、その一言一言に共感し、時には涙をさそわれる場面もあり、会場は感動に包み込まれました。

今回の補習校だよりを通して、補習授業校の教育の原点と魅力をあらためて考えるきっかけとしていただければ幸いです。

#### 送辞

在校生代表 W校高等部一年 松浦 玲七

今日卒業して行く先輩達へ  
一緒に過ごせたこの一年に、高等部に入った初めから言いたかったことが一つあります。それは「ありがとう」という言葉です。いつも言いたいと思っていたけれどなぜか普段、一緒にくすくす笑っている時、変顔している時、皆のノートに落書きしている時などはなかなか言えませんでした。でもこのようなフォーマルな機会を与えられて私はここに立ち、心を込めて感謝の気持ちを贈りたいのです。

高等部に入學した時、私は緊張していました。ニコニコしている子、髪がきれいな子、眼鏡をした子、背が高い子、そんな印象だけでそれ以外私は先輩の事を何も知りませんでした。教室に入ったらずい先輩に名前を聞かれてその日すぐ携帯番号とフェイスブックのリンクエラストが届きました。それから週を重ねるごとにクラスの中で先輩達と私達高一との距離はどんどん近付き、クラスは一つのかたまりになって行きました。先輩達は先輩面して格好つけているみたいだったけど、正直いうと無理やり先輩と呼んでみても、がらに合わないと思っていました。でも私達は尊敬していい訳ではありませんでした。初めから先輩達を友達として連想していました。そして今日、補習校から卒業していく先輩達は私たちに家族としての絆を残して旅立って行くのです。

今、学校生活を振り返ってみると生徒会活動を共に進めたり、お菓子をみんなで分け合ったり、たまつたストレスを発散したりしました。このような小さな出来事は私にとっては大切な思い出になっています。私は今年初めて蚤の市に参加することができました。中二でノースキャロライナから転校して来てから、毎日皆と出し物の準備やポスター作りをしていても当日は参加できませんでした。そして今回初めて私も実際にみんなと協力でき、先輩達と色々なことを経験できて良かったと感じています。

一年前、私たち高一は絆の深い高等部という環境に飛び込み、今は先輩達のいなくなる世界でおぼれないように涙をこらえていなくてはいけません。去年まで、現在の高一、九人は男女の区別やアメリカと日本の違いなどがあって、お互いの関係などが明らかに離れていきました。それが、先輩達のおかげで一人一人がしっかりとつながることができました。本当にかげがえのない一年を送ることができました。

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。日本、アメリカ、世界

中どこにいても連絡をください。これから、小学生は中学生に、中学生は高校生に、高校生は大学生に、そして世界へと皆それぞれに旅立ちます。過去を忘れず勇気を抱えながら前へ歩く姿を私達はまた見て学びたいです。大変な補習校という学校を立派に卒業していく皆さんのことを私は心から尊敬しています。そしてその姿を決して忘れないと思います。先輩達が残してくれた強い絆をまた下級生達とも結びながら、先輩達の後について行きたいと思っています。これから進まれる新しい道でもしっっかり頑張ってください。

## 答辞（一）

L I 校初等部卒業生代表 古庄 アカネ

本日は私たち卒業生のために皆さんからたくさんのお祝いの言葉、ありがとうございました。

私は、エルアイ校に、年長のときから今まで七年間通いました。

補習校では、もちつき大会や、運動会、バザーなど楽しい行事がたくさんありました。餅つき大会で、一番最初にもちをついたときは、お父さんたちと一緒にやりました。学年が上がって、自分でもちを付くようになって、きねが大変重いということが分かりました。五年生、六年生になるときねがだんだん軽く感じるようになりました。子供だけではなく、先生たちもいっしょに、みんなで力いっぱいもちをついて、最後に友達と早食い競争もしました。先生に、「ちゃんとかみなさい。」と言われてしまいました。

運動会は、私の一番大好きな行事でした。毎年いろいろな楽しいことがおこります。「デカデカパンツ」、「障害物競走で最後にパンを口で取るところ。」「応援合戦」「つな引き」、「紅白リレー」、エルアイ校はいつも赤組が勝つので、今年何年かぶりにわたしのいた白組が優勝して本当にうれしかったです。運動会の時は、なぜかいつも雨が降りそうになります。でも、お天気に関係なくいつも楽しかったです。どれもいい思い出です。補習校に入った最初の何年間かは、両親に行かされていたから何も考えずに行っていただけでした。漢字で百点をとると、おかあさんから一ドルもらえる約束をしたのでそれが、私のモチベーションでした。

三年生の時、日本の学校に体験入学をしました。国語の教科書は、同じところを補習校でも、習っていました。そのおかげで、日本の友達と一緒に「さんねんとうげ」を読むことができました。そのとき初めて、「補習校に行っていてよかった。」と思いました。

六年生になり、補習校に通い、日本語を習っているのは、本当は自分のためだということを時々思うようになりました。

六年一組は、上田先生。私の二組は、潮見先生でした。先生たちは、いつも私たちのことを考えて話し合いをしていたそうです。一組と二組は、先生も生徒もみんななががとともよかったのだとおもいます。私たちのために色々工夫して授業をしてくださいました。プロジェクトを使ったり、気分を変えるためにしりとりや、音楽をかけてその歌詞の書き取りをしました。この方が授業だけよりずっと楽しいです。

「上田先生、潮見先生一年間、ありがとうございました。」

## 答辞（二）

W 校初等部卒業生代表 福島 大朗

六年前の春、小学一年生で補習校に入学したぼくが、補習校の卒業の日を迎えることになるのは、あの時、まったく思ってもみませんでした。なぜなら、ぼくは一年か二年で日本へ帰国するはずだったからです。でも、父の仕事の都合でアメリカに残ることになり、今こうしてここにいるのです。

補習校がどういうところなのかもわからないまま、ぼくの補習校生活は始まりました。そしてそれは、宿題に苦しむ金曜日の始まりでもありました。補習校に通っている人のほとんどがそうだと思いますが、やはり宿題をするのは大変です。さらにぼくの母は、ほめて育ててくれるタイプではないので、いつも怒られてばかりでした。

三年生になった時、ぼくは野球をしていて、試合のスケジュールが補習校の時間と重なってしまい、早退や中抜けを繰り返していました。朝、漢字テストだけ受けてすぐに野球へ行き、試合が終わって、四時間目の途中に戻ってきたりしました。少しだけしか授業に出ないのだから、欠席すればいいのと思っていました。でも、母は、「一度休んでしまったら次からも休んでしまうから、たとえ短い時間でもいいから毎週通い続けなさい」と言いました。

高学年になると、勉強はさらに難しくなり、宿題も大変になっていました。それでも一つだけ楽しい宿題がありました。それは五年生の時の川柳の宿題でした。ぼくが作った川柳をクラスの友達が笑ってくれたのが嬉しくて、おもしろい川柳を作ろうと毎週、一生懸命考えました。この時は母と一緒に二人でおもしろい川柳を作っては大笑いしました。それからは、

川柳だけではなく漢字で例文を作る時も、いつもおもしろい文を書こうと思おうようになりました。おもしろいことを考えることで、嫌いな宿題も少し楽しくなりました。そして授業も楽しくなり、それまで手も挙げずに静かに過ごしていたぼくも発言できるようになり、最後にはうるさくて注意される存在になっていました。でも、それだけ先生やクラスの友達に受け入れてもらえたことが、ぼくの自信となったのだと思います。

そして、六年生。「一組」と知った時には「やった！」と思いました。なぜなら、それまでの五年間、僕はずっと二組だったので運動会ではいつも白組でした。五年間で優勝したのは一回だけ。ところが初等部最後の運動会では赤組。「やった！今年こそ優勝だ」と思っていたのですが、こういう時に限って白組が勝ってしまいました。ぼくの六年間の運動会の成績は一勝五敗でした。これは補習校での悔しい思い出になってしまいました。ぼくは、特別な生徒ではありません。六年間でもらった賞はただ一つ。四年生の時の俳句での賞だけです。でも、ぼくは補習校ですばらしい先生や大切な友達と出会うことができました。それは、つらくても通い続けたからこそ手に入れることのできた宝物だと思います。

ぼくの弟は四月から幼児部に入園します。弟の補習校生活が始まります。ぼくは先輩として、兄として、弟の大変さを一番理解できると思っています。補習校には、みんな、色々な思いを持って通っています。しかし、海外で日本語を学ぶことの大変さを理解できるのは、ここで学んでいるぼくたちだけなのです。この努力が将来きつとぼくたちの力になることを信じて、これからも補習校の仲間と一緒に自分のペースで通い続けていこうと思います。

### 答辞 (目)

W校中等部卒業生代表 アギスキー 中村 実奈

ニューヨークで生まれた私にとって、日本語は第二外国語で、日本は地球の裏側にある遠い国のはずでした、でもそのように思ったことは一度もありません。

十一年前、私はニューヨーク補習授業校L1校の幼児部年中組に入園しました。それからウエストチェスターに引越し、WT校幼児部年長組に転入して十年。私にとって補習校はなくてはならないものとなっています。毎週月曜から金曜は現地校に通い、土曜は補習校というのが日課で、まだ近所は静かな土曜日の朝、大急ぎで支度をし、朝ごはんを持って車に乗り

込み、補習校へ向かうのが当たり前なのです。

初等部の頃、補習校はただただ楽しい場所でした。日本人の友達に会えて、日本語が話せて、日本語の本を読めるので幸せでした。日本のことを現地校の誰よりもよく知っていた私は、アメリカの中で日本が体験できる補習校が大好きでした。

ところが、学年が上がるにつれて、アメリカに住んでいるクラスメイトは補習校を辞めていき、日本からやってきたクラスメイトは日本に帰ってしまい、私はいつもみんなを見送るだけ。せつかくできた親友と呼べる友人も日本に帰ってしまい、気がつけば私はポツンと取り残されてしまっていたのです。補習校は次第に楽しくなくなっていました。

中等部の最初の夏休みが終わる頃、日本からやってきた新しいクラスメイトが一気に増え、クラスはまさに『いまどきの日本人』でいっぱいになりました。もし溶け込めなかつたらどうしよう。流行りがわからなくて話についていけなかつたらどうしよう。浮いちゃつたらどうしよう。長く通っていた補習校では日本から来たみんなを迎える立場のはずなのに、不安で胸が押しつぶされるような気持ちでした。

でも、毎週土曜日に顔を合わせていろいろ話すようになって、実はみんなの気持ちもたいして変わることがわかりました。新しくやってきたクラスメイトも、それぞれに違う不安を抱えて心細い気持ちでいたのです。補習校に行けば、同じ気持ちを持ったみんなに会える。季節が変わり、球技大会、のみの市、書初め、百人一首大会、と、行事のたびに仲間意識が芽生え、先輩後輩意識のようなものも生まれ、勉強を通してだけでは育たないだろう絆が出来始めました。憧れの制服こそないけれど、補習校の中等部生活は、私にとって青春そのものになっていきました。

振り返ってみれば、これまで日本からやって来た多くのクラスメイトの誰もが、人を傷つけることのない、優しく思いやりのある仲間でした。日本ではいじめが問題になることもあるけれど、ここではそんなことなどありえない。補習校でそんな仲間達にめぐり合えて、私はとてもよかったです。と思っています。

補習校に通ってきて一番辛いのはクラスメイトとの別れです。一度知り合った人を忘れることなどはやすくはない。今日、私たちは補習校W校中等部を卒業して、それぞれの道に進みます。違う道でも、ニューヨークの補習校で過ごした素晴らしい思い出を忘れないでください。みんなの未来が、希望いっぱいのものであることを願っています。

友達のように接してくれ、もう補習校なんか辞めたいと弱音を吐いた私

を力づけてくれた先生方。毎週土曜日、朝早く起きてお弁当を作り、送り迎えをしてくれたお父さん、お母さん。毎週を充実させてくれた先輩や後輩。たくさんの新しい体験をさせてくれた三年一組のみんな。すべてがあつて、今日を迎えることができました。ありがとう、感謝しています。

そして、私にとつてアメリカの中の日本である補習校へ。十一年間大変お世話になりました。

ニューヨークに残る私は、四月、補習校高等部に進学します。新しい出会いに期待して、あるかもしれない別れは乗り越えて、更になんぼろうと思つていきます。私の補習校での道は、まだこれからも続きます。

## 答辞 (Ⅱ)

LI校中等部卒業生代表　フィッシュマン　岩元　武蔵

「あなたはだれですか？」  
みなさんはこの質問にどう答えますか？　僕はこの場で自信を持って言える。「僕は日本人とアメリカ人のミックスだ！」と。それからもうひとつ、「補習校は　すでに僕の人生の一部になつていく」と。

僕は補習校に初等部から十一年間　通つていきます。この学校に通うことは僕の心を何度も複雑な気持ちにさせました。　金曜日になるといつも、山積みの宿題を見て現が迫つてきて、「いやだ、補習校に行きたくない！」  
「もう宿題なんか、やりたくない！」と思つていました。それでも土曜になると補習校に來ています。　学校に行けば、もう何年間も　勉強を一緒にしてきた友達に会うことができ楽しい。この友達とは毎週会いたかったです。でも土曜日までも学校に行くほどのかな？と　ずっと考えていました。　学校はほとんど日本人で、僕は数少ないミックスです。小学校の時は何も考えずに通つて來ていた補習校も、中学校になると時間も長くなつたし、現地校の友達はみんな楽しく週末を過ごしているのを聞いてうらやましい時もありました。学年が上がるにつれてミックスの子がどんどん減つて行きました。僕はみんなみたいに日本語の細かい意味合いや、日本の流行りも良く分からないし、自分がここにまだ來るべきなのか　悩み続けました。中学生になり　漢字がわからなくなつて來た僕には　補習校の勉強も大変になつて來たし、現地校の勉強もどんどん難しくなつていき、「もう補習校を辞めたい！」という気持ちも　どんどん大きくなつ

ていきました。

「どうして僕はまだ　補習校を続けているんだろう？」と考え始めました。でも、大変だと思つているのに自分の中から「まだ補習校を続けたい」という気持ちを感じました。「補習校をやめたいのに、補習校に行き続けたいのは　なぜなんだろう？」と、自分の中で考える事が多くなりました。　ずつとこの　気持ちは何なんだろう　とわからないままでした。

僕は小さい時から寝る前のリラックスした時に　母といつもいろんなことを話しています。僕が小学生の時は母が人間のモラルについて話してくれました。少しづつ大きくなつて來てからは、僕の心のおもいや悩みを母に話しています。そして今は人生について　漠然とポーツと考える事が良くなります。でも　「辞めたいはずなのに、なぜ補習校を辞めたくないと思うのか」　については　考えても、考えても、答えは出てこなかった。でもある日、気がついた。この補習校こそが自分のアイデンティティーの一部だと言う事を。「もう、やめたい！」と思いつつも通つて來た補習校こそが　僕のアイデンティティーだったのです。

僕はアメリカで生まれ育っています。日本での体験入学に行った事も幼稚園以外はありません。僕が知つている日本人の社会はこの補習校です。この学校は僕の日本人としての生活や、日本人の友達、日本の社会を知る唯一の場所です。ふだん現地校にいる時は、もう半分の僕の　アメリカ人としてのライフスタイルがあります。そして週末はもう半分の　日本人の僕がいます。この二つの世界をいつも両方経験し、二つの生活をしている　ぼくは　本当の意味でミックスと言えます。補習校では、アメリカに住んでいるけれど、日本の文化の中に住んでいる経験ができるのです。

中学生になつて　補習校で仲良くなつた先輩や後輩と過ごした時間は、今まで知らなかった楽しい世界でした。先生たちとも小学校の時よりもつと近い関係になつて、自分が受け入れられた感じがしました。そして僕がここまで通つてこられた一番の理由は、中三クラスの九人の仲間たちです。勉強は大変な時もいっぱいあつたけど、僕たちは一緒にがんばつて來た仲間です。深く強い絆で結ばれた九人の仲間です。九人それぞれがみんな良いキャラクターでした。君たちと知り合えた事は　僕の人生の大切な宝ものになりました。

このクラスが一番の思い出は、卒業記念のためにみんな作つた、Tシャツです。このTシャツの胸には、「絆」と言うみんなで選んだ言葉が書かれています。卒業にあたりこの中三のクラスには特に思い出のものがありませんでした。僕たちが過ごした中学校生活での気持ちが詰まつた卒業ア

アルバムも 卒業式まで手に届かないし、このクラスはこんなに仲がいいのに卒業アルバムだけだったら、なんか物足りないかもしれない。ある日、クラス委員の玉青が「Tシャツを作ろう」という提案をしました。そしてみんなで、「絆」と言う言葉に決めました。最初 僕はこの「絆」という言葉の意味が分からず、みんなにどう言う意味かと聞きました。「人間同士のつながりだよ」と教えてくれました。絆は、人と人との信頼があるからこそ生まれるもので、このクラスにすごく良く当てはまる言葉だと思います。このクラスは仲が良くお互い強い信頼があり、みんながすごく近い関係です。このTシャツの絆と言う言葉の下には、僕らのクラスのアイデンティティーである、「ひるね」「らくがき」「ボケツッコミ」「メロンパン」、そして「補習校」もプリントされています。この言葉の一つ一つが、僕らのクラスの思い出の言葉です。Tシャツの後ろにはクラスの名前の名前が書かれています。このTシャツは今年の1月ごろ出来上がり、それ以来この絆のTシャツはクラスのシンボルとなりました。ぼくたちはこのTシャツを毎週土曜日に着ることによって、前よりも、もっとも絆が深まり、そして今日の卒業式を迎えました。

今日、この卒業式からまたみんなの人生が変わっていきます。補習校を続ける人もいれば、続けない人もいます。僕は春から高等部に進学します。これから僕たちには大学の事が目の前に見えて来てこわいけど、どんな時でも僕たちはここで一緒にがんばってこれました。その時間を忘れないでほしい。

さいごに担任の森先生、諸先生方、中三の仲間、先輩、後輩、そして家族。僕たちをここまで支えて来てくれて、ほんとうにどうもありがとうございます。L I 校中等部で過ごした時間はわすれませぬ。

僕たちはきつと 日本とアメリカの絆をつなぐ人となります。

答辞 (V)

W校高等部卒業生代表 フォング 小山 紗良

補習校と私は十二年というとても長い歴史があります。空に浮かぶ星の数よりもたくさん経験や思い出、出会いや別れを繰り返してきました。良いこと、悪いこと、そして忘れてしまった事も含めての全部が今ここに立っている私です。

この十二年間を振り返ってみると、どんなに継続することが大変だったかを深く深く感じます。私の母がよく私に言っていた言葉は、「始めるの

は簡単、やめるのはもっと簡単。でも続けるのは一番難しい」でした。確かに、補習校に通うのは決して真つ直ぐな道を歩くようにはいきませんでした。例えると、それは雨が降る中、裸足で高い富士山に登るようなものでした。小学四年生くらいまでは、比較的、歩くのが簡単でした。親の後ろをおりこうに付いて行くだけで、簡単に登れました。運動会、カレー作り、餅つき大会などたくさん楽しい学校行事があり、一年間はあつという間に過ぎてしまいました。ところが五年生からは山はどんどん急になり、親のあとを付いて行くというよりも、後ろから親に押されながら、いやいや登らなければいけなくなりまりました。補習校を続けるかやめるかの親とのけんか、悪い点数、クラスメートや先生との関係などが岩のように転がり落ちて来て、富士山のでっぺんまでたどり着くのがどんどん難しくなっていました。その時、私は転んで山から滑り落ちるのが怖かったです。そして努力がつかなく、補習校をやめたかったです。

でもあきらめずに時間をかけ、頑張つて登り続けたら、登っただけ私の仲間が増え、山を登る楽しさに気が付き始め、以前は気が付かなかった補習校の素晴らしさを感じ始めました。そして、中等部からは私自身も積極的に補習校に来たくなかったのです。中等部の雰囲気は初等部の雰囲気と全然違って、大家族のように毎週を過ごしました。クラスメートはみんな日本の文化とアメリカの文化にはさまれて苦労していたので、自然に私たちみんなの関係が強くなりました。時々先生がお菓子を私のために作つて来てくれたり、ある先生は面白い話を私達に聞かせてくれたりしました。そして先生の冗談に私達はあきれた顔をしながらも、思わず笑ってしまったことがたくさんあります。それは本当に楽しいひとときでした。

一方、補習校での学習はどうだったかと言えば、それはとてもとても大変でした。特に日本語は日常的に触れている言葉ではないので、使う機会が少なく、なかなか身につかなくて苦労しました。中でも社会や理科を使う言葉は先生が一生懸命教えてくださるのですが、知らない言葉ばかりで大変でした。そしていつでも、どんな時でも先生方と困った事や、嬉しかった事など何でも話し合える環境が高等部のクラスに作られていました。必ず先生たちは真剣に私達の話に耳をかた向けてくれ、話し終わったら、人生の中でも大切なアドバイスを与えてくれました。そういう先生方は一生忘れられない私達の宝物だと思います。そして高等部のクラスメートはみんな最高でした。私はみんなを誇りに思っています。私達はまるで兄弟のようにふざけあつたり、時にまじめなことを話合つたり、相手の立場になって考えたりしました。そのような充実した補習校生活を過ごし



て来ました。日本人の感覚で色々理解してくれたり、悩みを聞きあったり、本当にみんなで相手の悲しみや苦しみを半分にし、喜びや嬉しさを千倍にし合ってきたと思います。

でもどんなことにもいつかは終わりが来てしまいます。だからと言って、私はこのことをそのままにしたくはありません。この十二年間で作った思い出や経験、日本語と日本独自の素晴らしい文化を学び、十二年間かけて築きあげた友達関係や先生たちとのいろいろな絆は一生切れないし、一生忘れはしません。いつまでも私の大切なものとして生かされていきます。そしていつか私に子供が生まれたら、私は迷い無く子供を補習校に通わせます。私が補習校で経験した素晴らしいことを、ぜひ次の世代に伝えたいのです。

今日卒業を迎える私のクラスメイト、今までご指導してくださった先生方に心からお礼を伝えたいです。富士山なんか比べられないほど大きな大きな声で私は言います。ありがとうございます！！

## 答辞 (VI)

LI校高等部卒業生代表 金 成美

今年度の三月末、私にとつての最後の先輩たちが卒業した。高等部卒業生の答辞はいつも補習校への熱い思いが詰まっています、その先輩たちと共に時間を過ごしたことを誇りに感じる。特に去年のLI校卒業生答辞は、その先輩たちと親しかったため、以前の答辞よりはるかに深く心に響いた。笑いあり、涙あり、補習校での様々な経験が詰まった実に美しい答辞だった。「補習校に通っている全生徒がこれくらい補習校を好きになれたら、最高だな。私も、高二になったら気合いを入れなきゃ。」と思いつつ、どうしたら補習校をより充實的で楽しい場にできるか、超前向きに考えていた。

新学期、新入生が新しい環境に慣れたころ、補習校恒例の生徒会役員選挙が行われた。皆、生き生きと生徒会活動に励んでおり、珍しく十二人ほど大勢の新中学一年生が進級してきたので、未来は明るく見えていた。だが、甘かった。全て思い通りにいくと思っていた自分が恥ずかしい。始まりは悪くなかったが、ミスコミュニケーションが深く響き、徐々に生徒会活動が崩れていった。役員全員、離れて住んでいるうえ、フェイスブック以外での連絡法はなく、連絡がうまく出来ないことが増えていった。そのうえ、現地校での活動や、SATなどのために数人もいっぺんに補習

校を欠席する日も重なった。そしてついに私は、一番生徒会活動を経験している自分が一人でペーパーワークを済ませたほうが効率的だと結論付け、それを実行した。これがどれほど無茶なことか、十一月の秋祭りまで私は完全に理解していなかった。

秋祭りはLI校伝統の行事で、保護者会が体育館と講堂を使ってバザーを行う。今年の秋祭りでは、生徒会が率先して被災地の福島県に在る豊岡中学校への募金活動を行った。生徒会は古本屋とゲーム屋の二種類を主催していた。屋台を四つ用意し、準備は万端だと思っていたが、色々なハプニングと見過ごしたミスのせいで、トラブルがどんどん発生した。最終的には、約二千ドルほど集まって募金活動は成功で終わったが、私の中では、もっと頭を回していればよかった、もっと他の皆と色々話し合えばよかったのにと、後悔と反省で溢れていた。後輩に所々生徒会の仕事を託していたつもりだったが、一つ二つのパーツを託すだけではなく、考えていることや計画を全てさらけ出し、お互い頼れる存在になるべきだった。この一件で、チームワークの大切さと一人相撲の不可能さを思い知った。

生徒会の仕事は本来、役員全員が力を合わせても難しく、とても一人でやり切れるものではない。しかし、私は自分一人で仕事を済ますという、楽な選択肢を選び、後輩たちが生徒会のペーパーワークや仕事に慣れる機会を奪っていた。私は、リレーのランナーが、一人でトラックを一周するようなミスを犯し、危うく伝統引継ぎバトンを渡し損ねるところだった。素晴らしい伝統も引き継ぐ後輩たちがいなければ、そこで途絶えてしまう。二学期が終わる前に、数人の生徒がLI校を辞めていった。私のクラスも最後は生徒会長と私のたった二人になってしまったので、理由は分かっている。現地校を優先したい、補習校に通っている意味が無い、宿題をやらなかつたから親にやめさせられた。辞めていった生徒たちの気持ちは痛いほど分かったが、それでも、私は補習校を辞めたことが納得できなかった。

最後まで続けること。それは決して簡単な道ではない。だが、今まで補習校を卒業した先輩たち、そして今日、卒業する私たちも、補習校を辞めたいと思ったことは何回もある。それでも、辞めないで最後までがんばったのはなぜだ？ 補習校は「大好きで大切な場所。」本当にそれ以外、理由は無い。

皆、補習校では日本語力以上にもっと大事なものが得られることを実感しているだろう。クラスメイト、先輩、後輩、そして先生たちと共に時間を過ごすことで生まれる「絆」。感じているはずだ。補習校は生徒たちが

築く「絆」そのもの。そしてこの「絆」こそが補習校の意思となつて、先輩から後輩に伝統と共に託されていく。

でも、この「絆」の深さと愛しさは、高校二年生にならなければ完全には理解できない。後輩たちに手を差し伸べる側になつて初めて理解できる。補習校の学費は高いかもしれない。だが、ここで私が得たものには値段はつけられない。

だから、保護者の皆さん、子供たちに補習校を続けさせてください。宿題を助けてあげてください。家庭でもっともっと日本語を使つてあげてください。辞めさせないでください。

後輩たち、どうか、やめないで。絶対に後悔しないと保障するから。いずれ、「補習校に最後まで通つてよかった。」と思う日が来るから。補習校の素晴らしさは自分で最後まで通つて、自分自身で実感してほしい。私は今日、卒業するが、何年かのち、「ああ、あの先輩はこの感情を伝えたかったんだな。」と理解する日がきて、補習校の伝統を受け継いでくれることを心から信じている。